平成29年度中央地区ふれあい講演会報告

テーマ	災害から、自分と家族の命・生活を守るために
日　時	平成29年12月12日（火曜日） 午後2時から午後4時まで
場　所	尼崎市立中央公民館小ホール
講　師	兵庫県立大学大学院　減災復興政策研究科 准教授　紅谷　昇平氏
参加者	５１人
事業の目的	近年、台風や豪雨、地震などの災害が頻繁に発生し、各地で多大な被害がでている。 いざという時、災害から自分と家族の命・生活を守るためには、日頃からどのような取組みが必要かを考える機会とする。
講演内容	防災の“当たり前”ウソ・ホントクイズが出題され、参加者も一緒に考えながら、理解を深める事ができた。災害時の、命を守る３つの段階、①地震直後、②直後から３日後、③３日後～について各段階で求められる対策の説明があった。①建物の倒壊などで下敷きにならない、②火事や津波から避難する、③一定水準の避難生活をすごす（関連死を避ける）、避難者の特性にあわせた支援を受ける。 災害時における死亡率が高いのは高齢者、障がい者、要援護者の支援者などである。障害の有無だけでなく、生活環境（施設か、自宅か）、施設の立地（低地か、高台か）が被災に大きく影響している。問題は、「障害があること」ではなく、「社会環境」や「防災対策の不備」かも知れない。社会が適応したサービスを提供しておらず、ケアが不十分であったためと考えられる。また、地震後、十分な医療が受けられず、障がいが残ってしまった「震災障害者」が阪神・淡路大震災では、数百名以上いる。兵庫県で平成２２年に震災障害者への調査を実施し、アンケートには「もっと目を向けてほしかった」「もっと早く救出してもらっていれば」などの意見が書かれていた。 地震に対して、家庭・地域が出来ることとして、①地震直後の犠牲を防ぐ、②地震後、安全な場所へ避難する、③避難生活を改善する、などそれぞれ説明があった。避難所における女性、子どもへの配慮も必要である。水害と火災への対策についても説明があった。 防災訓練の効果は、続けることに意味がある。知らないと怖いが、防災の知識をしっかりと身に付ければ恐れることはない。一つひとつの対策の積み重ねが大切である。 防災活動を行う前に、地域のコミュニティをつくること、「守りたいと思える地域、ご近所関係」をつくることが大事である。

参加者からの感想	・災害時要援護者への具体的な行動についてももっと知りたかった。 ・丁寧な話し方で、非常に解り易い説明でした。 ・身近なことであり実践しやすい。 ・自分だけでなく、助け合っていかなければ災害を防げないことがわかった。 ・防災に関する知識、意識を高めることができた。
成　果	過去の災害の実例を基に、防災に関する適正な対応について具体的な話があった。 個人ができる事、地域、行政の役割等を解り易く話して頂き、大変参考になった。